



ムカシの競馬を読む



すだ たかお
須田 鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレッド大阪日刊スポッなど各種媒体に寄稿中。

いまから10年前、平成17年の12月といえば、ハーツクライが有馬記念に勝った月。実際には「デイープインパクトが有馬記念で負けた月」とご記憶の方も多いことだろう。

いま当時の記事を振り返ってみると、「飛ばなかった」などの見出しで敗戦がセンセーショナルに取り上げられている一方、関係者は冷静だった様子が読み取れる。12月26日のデイリーに載ったコメントでは池江泰一郎は「よく走っている。これも競馬だよ。古馬との経験の差が出たということや」と愛馬をかばい、市川厩務員は「いまはお疲れさんと一言つてあげたい。現役中には山も谷もある。最後までしっかりと面倒を見てあげたい」と翌年以降を見据えている。競馬に勝つのは簡単ではないことを知り尽くしていればこそコメントだろう。

上の武豊騎手の好調ぶりもあった。前年にはいまま破られていない記録を樹立している。25日付のサンスポから引用しよう。

「2005年はデイープの年、そしてユタカの年。24日の阪神競馬9Rで、武豊騎手がまたも大記録を樹立。昨年の自身のJRA年間最多記録『211』を上回る212勝目をマークした」

この記事の最後は、「2005年JRA総決算の今日25日も、ユタカの日となりそうだ」と締めくくられている。人馬ともに隙なし、という印象を強めて迎えた有馬記念だった。

単勝が売れていたかということがよく分かる。

有馬記念へお祭りムードの競馬界だったが、世間ではこんな事件も起きていた。12月8日付の毎日新聞から引用する。

「東京三菱銀行の預金口座から総額約9億9千万円が引き出された事件で、詐欺などの疑いで逮捕された〇〇容疑者と夫の無職××容疑者(筆者注：記事は実名)が競馬の電話投票用の口座を設け、約2億5千万円の馬券を購入していたことが7日、神奈川県警捜査2課の調べで分かった。同課は、馬券購入費の大半は着服した預金を充てていたとみて裏付け捜査を進めている」

同じ件を報じた報知新聞によると、「一度に50万円前後を購入していたという」記載がある。2億5千万円に対して50万というところ50分の1。豪快に着服したわりに堅実な賭け方という気もする。そういう

う問題でないのは分かっているが。よくある着服・詐欺事件からの「競馬に使った」という報道に見えるが、実はこの頃、同種の事件が多発していたので大きく報じられた面もある。前月29日には近畿大阪銀行天神橋筋支店の行員が客の預金から金を引き出して競馬に使っていたことが分かり、懲戒解雇になっている。さらに同銀行では甲東園支店の営業課長がやはり横領↓競馬で懲役5年6ヶ月の実刑判決を食らったばかりだった。

「もつとも、この種の事件には「競馬で使った」と言っておいて、どこかに金を隠しているケースもある。これらの事件の犯人は実刑を受けても既に釈放はされているはず。その後の暮らしというのはチェックされているのだろうか？」

いまから20年前、平成7年の12月は歴史的な勝利があった月。12月11日付のサンスポから引用する。



ムカシの競馬を読む

平成17年・中山競馬場
有馬記念
優勝馬：ハーツクライ

© JRA

「香港国際カップ(国際G2)は同日、シヤテイン競馬場で12頭によって争われ、日本から遠征した蛭名正義騎手騎乗のフジヤマケンザン(栗東・森厩舎)が、好位から抜け出し1分47秒0のタイムで快勝した。日本馬が海外のレースに優勝したのは1959年のハクチカラ(米ワシントンバースデーハンデ優勝)以来36年ぶりの快挙となった。しかも、日本馬が国際Gレースを制したのははじめてのこと」

当時の香港カップは「国際がレース名に付いており、距離も今の2000mとは異なり1800mだった。記事にあるようにグレードもG2だった時代だが、それでも日本は大いに湧いた。筆者も沙田競馬場で見ていたが、馬券的にもかなりの好配当を取らせてもらったものだ。この勝利があったからこそ日本馬の海外遠征熱が盛り上がり、シーキングザパールやタイキシャトル、最近ではジャスタウェイなどの勝利に繋がっていった面もある。フジヤマケンザンの果たした役割は大きい。

同じころ、中央競馬ではひとつの幕が下りようとしていた。レースより前の記事だが、12月6日付の読売新聞夕刊から。

「中央競馬から、アラブ馬のレースが姿を消す。9日に愛知・中京競馬場で行われる『アラブ大賞典』がラ

ストランになる。サラブレッドに比べ脚質が落ちるなどの理由から(筆者注：原文ママ。脚力が落ちる、というふうな意味と思われる)、人気低迷が続いていたためだ。今後の出走を地方競馬に事実上限定されたアラブ馬の生産農家や、厩舎関係者は不安と寂しさを訴えている」

記事ではアングロアラブ系競走の歴史と衰退の経緯、園田もサラ導入を検討していることなど、一般紙にしてはかなり詳しく報じている。さらに活躍馬であったシゲルホームランも登場している。

このレースを制したのは、当時3歳(現表記)牝馬だったムーニンリットガール。この馬はその後中央に残り、サラブレッドを相手に3走したヌプリンターズにも出走している。つまり、「アラブ系競走」はこのアラブ大賞典が最後だったが、中央で走ったアラブは、その数カ月後までいたということになる。

これが20年前ということとは、若い会員さんの中には中央のアラブ系競走を見たことがないという人も多いのだろうし、場合によると地方(最後のアラブ系競走は6年前の福山)でも見たことがないかもしれない。いまでもレース名などで「サラ系〇歳上……」となっているのは、ここに由来があるのだ。

最後に30年前、昭和60年の12月から。当時公営競技界では暴力団追放運動が進んでいたことは以前紹介したが、反発からこんな事件も起きた。12月7日付の日刊スポーツから引用する。

「6日午後2時27分ごろ、兵庫県尼崎市の園田競馬の第7Rで、男が馬場に飛び出し、ゴール前約30メートルに差しかかった馬群の直前を白いタオルを振りながら横切つて走り抜けた。驚いた1頭が外側コースに逸走、そのためレースは不成立となり、4200万円の売上金をファンに返還した」

同じ日の第2レースでは、コースに爆竹が投げ込まれる事件も起きている。犯人はともに、ノミ行為に携わっていた暴力団の準構成員だった。ここまでするほど、当時「公営競技場内でのノミ行為」は暴力団にとって重要にシノギであったことが分かる。

ちなみに同日の神戸新聞によると、不成立となったあと、入線順位と同じ組番の馬券を持っていたファン約100人が競馬場内の警官詰所で騒ぎ、さらに翌8日の開始前にも数十人が騒いだそうである。こんな感想を言つては怒られるかもしれないが、「いろいろな意味で、昭和の園田らしい」という印象の事件である。